

ドストエフスキー・ノート 8 「ヴラース」：社会 評論と小説に共通のテーマ

著者名(日)	中村 健之介
雑誌名	大妻比較文化：大妻女子大学比較文化学部紀要
巻	15
ページ	14-29
発行年	2014
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00005924/



ドストエフスキー・ノート 8

「ヴラース」——社会評論と小説に共通のテーマ

中村 健之介

1 ネクラースフの物語詩『ヴラース』

ドストエフスキーは一八七三年、週刊誌『市民』に連載した「作家の日記」の第五回「ヴラース」で、友人だった詩人ニコライ・ネクラースフの物語詩『ヴラース』を紹介している。『ヴラース』は、一八年前の一八五五年、進歩派の雑誌『現代人』六月号に発表されたものである。

百姓外套の胸ははだけたまま

帽子もかぶらず

ゆつくりとした足どりで町を行く

ヴラースじいさん、髪は真っ白。

胸に銅のイコン〔聖像〕を掛け

聖堂建立のための喜捨を乞う……

ネクラースフはドストエフスキーの青年時代からの友人である。一歩先に文壇に出ていたネクラースフの親切的な紹介のおか

げで、一八四五年、二四歳のドストエフスキーの処女作『貧しい人たち』は批評家ベリンスキーに認められ、ドストエフスキーは作家としてデビューすることができた。（ドストエフスキー『作家の日記』一八七七年二月、「ネクラースフの死」参照）。

物語詩『ヴラース』の主人公ヴラースは、ネクラースフの父親の農奴だった男がモデルだとわかっている。その男は兵役に出された。農奴制時代のロシアでは、領主（地主）は、丁年農奴七〇人から八〇人に一人の割合で兵隊一人を政府に「供出」せねばならなかった。

兵役期間は、なんと二五年であつた。行賞^{こうしょう}に与ると一五年に短縮されるので、途中で兵役解除になって帰郷できた者もいた。トルストイの短編『兵隊の女房の暮らし』に、そういう農民が出てくる。しかしそれはまれなことで、農奴は、一旦領主の命令で兵役に出されれば、それで家族とは永の別れということも、めずらしくなかった。農奴の生きるよろこびはわずかだった。ネクラースフの父親の農奴だったヴラースは、若い頃は信仰

のかけらも持ち合わせておらず、気分にかかせて女房をなぐる乱暴者で、馬泥棒たちの仲間に入って悪事をはたいたりもした。領主は、そういう困り者の農奴を兵役に出して追い払ったのである。

ヴラースが長い兵役を勤めあげて故郷の村にもどってきたときには、身内は死に絶えていた。初老のヴラースは重い病氣にかかった。そのとき、かれはおそろしい地獄の夢を見たという。地獄に堕ちた者たちが鬼どもに責められ、熱い床を舌で舐めさせられていたのである。

幸いにも病の癒えたヴラースは、心を改め、聖堂建立の祈願を立てて、巡礼となる。かれは「神の命じられた仕事」のために、喜捨を仰いでロシア各地を遍歴したという。——ネクラソフの『ヴラース』は、そういう物語詩である。

東京神田駿河台の「ニコライ堂」で知られるロシア正教の宣教師ニコライ（一八三六―一九一二）の父ドミートリー・カサートキンも、兵役にこそ取られはしなかったが、晩年の三〇年間、巡礼となり、ペテルブルグ、モスクワ、トヴェーリなどを巡り歩き、かつて自分が働いていたスモレンスク県の聖堂の復旧をめざして喜捨を集めた。ロシアには、いたるところに、たくさん巡礼や乞食がいた（中村健之介『ニコライ』ミネルヴァ書房、および中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記』教文館 第一巻註解No. 205「修道院と巡礼の関係」参照）。

2 ドストエフスキーは「苦しみによる償い」に集中する

ドストエフスキーはネクラソフの『ヴラース』のどこに惹かれて、これを自分の編集する雑誌『市民』に取り上げたのか。『ヴラース』には、当時のロシアの街や人、貴族とナロードの社会的関係を示す光景も書かれている。しかしドストエフスキーはそれには目もくれない。かれは、ヴラースがかつての自分の無知暴虐を深く悔いて、その「償いとして」の苦行の旅に出たという点だけを切り取って紹介している。ドストエフスキーはヴラースに、「自分を救うために苦しみを求める」ロシアの百姓（民衆）の姿を見たのである。

「人は、生きてゆくためにさまざまな悪行を犯す。しかし、やがてそのことを悔い、罪の意識を拭いとるために、自らを罰しようとするのだ。その自己懲罰心こそは、人間の高貴さの源であり証である。たしかに、その心は知識人の間では失われた。しかし、ナロードの内には、その高貴な自己懲罰欲求はまだ残っている。ヴラースは、罪を悔い、自らを救わんとして苦しみを求めているのだ。ネクラソフはそれを知って心を揺さぶられ、この物語詩『ヴラース』を書いたのだ」——それが、ドストエフスキーの解釈である。

「ヴラースの、このおそるべきへりくだりの力、自分を救おうとする欲求、苦しみを求めるこのはげしい渴望 [страшная сила смирения, потребность самоспасения, страшная жажда страдания]、それが、あなた「ネクラソフ」のような

gentilhomme〔貴族〕に、衝撃を与えたのだ」と、ドストエフスキーは書いている（ドストエフスキー『ヴラース』21―32）。

ドストエフスキーは『ヴラース』に、「苦しみを求める渴望」を見出し、その弦を強くかき鳴らし、ナロードの深い精神性、高い道徳性を高らかに歌い上げている。

3 主観的な批評家ドストエフスキー

この『ヴラース』紹介は、ドストエフスキーの批評の特徴をよく表している。他人の作品に自分と同じ考えを見つけると、それを取り上げて、激賞するのである。ドストエフスキーはすでに『死の家の記録』（一八六一年）でも、同じナロードの道徳性の称賛を行っていた。『ヴラース』紹介は、その続編である。

逆に、自分と対立する考えを見つけると、たとえばトルストイの『アンナ・カレーニナ』についての批評に見られるように、ドストエフスキーは攻撃に出る（ドストエフスキー『作家の日記』一八七七年七月八月合併号、第二章『アンナ・カレーニナ』第八編について参照）。

つまり、あくまで「自分」中心なのである。友人だった批評家ストラーホフは、「ドストエフスキーは、他に類のないほど主観的な人だった」と言っている（ストラーホフ『ドストエフスキーの思い出』）。

ドストエフスキーは、「ヴラースの、自分を救おうとする欲

求、苦しみを求めるこのはげしい渴望、それが、あなたのような gentilhomme に衝撃を与えたのだ」と言っているが、この「あなた（ネクラースフ）」は、ドストエフスキー自身だと言ってよい。

4 ドストエフスキーの「自己懲罰欲求」の特徴

ドストエフスキーがネクラースフの『ヴラース』に発見した唯一最大の宝物は、「自己懲罰欲求」である。冷静に見れば、『ヴラース』のメイン・テーマは、同じネクラースフの代表作『ロシアはだれに住みよいか』（一八七七年）と共通の「ロシア遍歴」なのだが、ドストエフスキーは作者ネクラースフの意図におかまいなく、自分の見つけた宝物にばかり光を当てている。

これは、ドストエフスキーが「自己懲罰欲求」というテーマが好きで、自分の好きな宝物をネクラースフの『ヴラース』に見つけた、ということなのである。『カラマーゾフの兄弟』の青年将校ジノヴィイ（後のゾシマ長老）を突き動かしたのも、ヴラースと同じ「贖罪の願望」である。気分がむしゃくしゃしていたジノヴィイは、何の咎もない従卒を思い切り殴りつけた。翌朝、罪悪感に襲われたジノヴィイは、従卒に謝罪し、やがて軍人を辞め、修道士となり、ヴラースと同じようにロシア各地遍歴の旅に出る。

しかし、ドストエフスキーとネクラースフの「自己懲罰欲求」には、明らかに違いがある。ドストエフスキーのそれには、ネクラースフにはない、強烈的な偏向的想像、あるいは病的心理が

ある。

『罪と罰』の塗装職人ミコルカは、何も悪いことはしていないのに、自分の内から罪悪感と自己懲罰欲求が湧いてきて、それに脅迫されて、自分は金貸し老婆殺し事件の犯人なのだと想像し、自首したくなる。いわれない罪悪感と想像に自分が食われてしまうのである。

同じ『罪と罰』のスヴィドリガイロフも、投身自殺した少女の顔が夢に鮮明に浮かんで、その夢のイメージを振り切ることができなくなり、強烈な自己懲罰欲求に引き込まれて、発作的にピストル自殺する。

『おかしな男の夢』の主人公「わたし」は、重い「罪悪感」「憂愁感」に引き込まれて自殺直前まで進む。かれの場合は少女が想像裡に現われて、自殺を止めてくれる。これも、スヴィドリガイロフの場合を裏返しにしただけの、同じかたちの、想像と感覚の劇である。

『作家の日記』（一八七六年一〇月）の「二つの自殺」は、ゲルツェンの娘の死と、新聞に載った「イコンを胸に抱いて四階の窓から身を投げた」女の死を取り上げている。そこには「憂愁感」ということばはない。しかし、その新聞記事を種にドストエフスキーが作った短編『おとなしい女』の基底にあるのは、重い憂愁感と罪悪感である。

なぜ、ドストエフスキーの世界では、このような、いわれない「罪悪感」に引きずられた自殺がくり返し起きるのだろうか。

か。

友人ストラホフは次のように書いている。

「ドストエフスキーが語るには、かれはてんかんの発作の度に、重い憂愁感に襲われた。その憂愁感の特質は、自分が何か罪悪を犯した者であるように感じられるという点にあった。自分ではなぜかわからない罪の感じが、大罪を犯したという感じが、心に重くのしかかってくるように感じられたのである」（ストラホフ『ドストエフスキーの思い出』）。

同じかたちの、夢幻劇のような自殺劇がくり返し書かれるのは、それが、社会的あるいは人間関係上の原因のない、作者自身の夢の体験だからある。それらはすべて、作者自身の重い「憂愁感」「罪悪感」の表現なのである。

ドストエフスキーは、生涯、「罪悪妄想」に襲われていた人だった。実際に罪を犯していないのに罪悪感にとらえられ、その償いをしなければならないという贖罪欲求に衝き動かされており、その自分を作中人物に生かしたのである（中村健之介『ドストエフスキー・生と死の感覚』38頁の「スヴィドリガイロフの世界感」参照）。

つまり、ドストエフスキーは、ネクラソフの『ヴァース』に自分を読み込んだのである。

そして、このいわれない罪悪感から逃れる道として、「苦しみを引きうける」という自己懲罰の道を考え出した。「人は苦しみを愛する」という、ドストエフスキー文学の大きなスロー

ガンの背後には、作家自身のこのような心的事情が存在している。ここでもドストエフスキーは、ストラーホフの言うとおり、「他に類のないほど主観的な人」である

5 知識人の場合の苦しみの欲求

ドストエフスキーによれば、ヴラースの「苦しみたい」という欲求は、ロシア農民の内に保持されている高貴な「贖罪の願望」であって、知識人の内からは消えたものだ。〈知識人は、ナロードの前に頭を垂れて、その高貴な心を学ばねばならない〉というのが、ドストエフスキーが、シベリア流刑体験を書いた『死の家の記録』で発していたメッセージだった。

〈自分の生き方を悔いて、苦しみによって後悔を消したいという欲求は、知識人の間ではすで失われた。自信を失った知識人は「ヒーロー」の仮面を着けて、いまや演技者として生きているのだ〉というのが、ドストエフスキーの基本的な知識人理解である（中村健之介『地下室の男』——現代ロシア人の代表』、『ドストエフスキー・作家の誕生』所収参照）。

しかし、一般に作家は、自分の最も深い関心事を語る者である。「主観的な人」であったドストエフスキーも、そうである。かれは、自分の「お気に入り」のテーマを、つまり「自分」を、手を変え品を変え、飽くことなく語り続けた。

「罪悪感」と「贖罪の願望」は、色やかたちはケース・バイ・ケースで違っているが、ドストエフスキーの作品の至る所に潜

んだり、立ち現われたりしてくる。それは、ナロードにも知識人にも、現われてくる。

もう一度言うが、ドストエフスキーは自分のテーマをところかまわず、飽くことなく追い続けている。『地下室の手記』（二八六四年）では、首都ペテルブルグに住む知識人「地下室の男」の「苦しみたい欲求」を書いている。ナロード「ヴラース」の「贖罪の願望」は、「現代ロシアの都会の知識人」の内にも生きている。

ドストエフスキーによれば、「地下室の男」すなわち「現代ロシアの知識人」は、「抽象的人間」「紙でできた人間」「死産児」である。ところがその「死産児」の内にも、シベリア流刑であれ、巡礼によってであれ、苦しみによって、「何かの償いをしたい」という自発的欲求が、生き残っている。それが、ドストエフスキー自身の問題だったからである。

そうであることがわかると、『罪と罰』のラスコーリニコフ、『悪鬼ども』のスタヴローギン、『カラマーゾフの兄弟』のドミートリーも、ゾシマの兄マルケルも、よく理解できるようになる。かれらはすべて、何らかの苦行によって「死せる生」から「生ける生」へ帰ろうと試みている。

ドストエフスキーの世界には、ナロード、知識人の別なく、「罪悪感」に憑かれた一族がいるのである。

知識人のそれは、もはや高貴で健全な「贖罪の願望」ではなくなっている場合もある。「苦しみを愛する」というマゾヒズ

ムに変形している場合もある。「地下室」の「わたし」が告白するように、直截な「生ける生」はなぜか息苦しく、虚栄を生きがいとする「死せる生」の方がかえって「気に入っている」知識人もいる。

「地下室」の男は、「冷たい地下室」を出て、人びとと共に語る「生ける生」に向かう扉がどこにあるか、知っている。初心な娼婦のリーザが扉の向こう側に立って、かれが出てくるのを待っている。だが男は、虚栄という生きがいを捨てることができない。男は「毒を食らわば皿までも」という気持ちになっており、そういう自虐の心性を振り切ることができない。むしろ苦しい「地下室」生活に奇妙な快感を覚え、倒錯的な「苦しみという快楽」を離れようとしない。

しかし、その「死せる生」にどっぷり浸かった「死産児」でも、「本音を言えば、わたしの求めているのは、こんな地下室なんぞではないのです。別のものがほしいのです。(生ける生)はやってこないのでしょうか」と呻くように告白している。

さまざまな様態^{モード}の「苦しみたい」欲求があるが、実はそれらは同じ回生の希求なのだ。それが、ナロードにも知識人にも通底しているのである。

「地下室」の男が「苦しみを愛する」のは、ドストエフスキーによれば、必ずしも、倒錯した心理だ、マゾヒズムだ、とはいきれない。

ドストエフスキーは、苦しみは、虚栄と傲慢の感情を消し、

やわらかな感情を回復させる効能を具えていると考えている。苦しみという薬によって、もう一度「感情の開花」が可能だ、「死産児」が「苦しみに愛着」するのはマゾヒズムではない、というのである。「地下室」の男の「苦しみへの愛着」は、ドストエフスキーが解釈したヴラースの自己処罰の欲求に通じている。

『罪と罰』のリザヴェータはソーニャに、「苦しみがなければ喜びはない」と語る。『悪鬼ども』のスタヴローギンでも、『カラマーゾフの兄弟』のゾシマでも暗示されている「よみがえり」の方法は、「苦しみを背負う」である。『地下室の手記』や『おとなしい女』の「死産児」も、「太陽が死んだ」ように感じられる「死せる生」からの脱出をめざすとき、苦しみのトンネルを見る。

6 もう一人の「ヴラース」——聖パンを撃つ農民

「作家の日記」の第五回「ヴラース」の後半は、「もう一人のヴラース」の話である。「苦しみ」という大きな主題は続いているのだが、ドストエフスキーは、「現代」ロシア社会には、ネクラソフのそれとは違う「苦しみ」を抱えた「もう一人のヴラース」がいる、それを紹介しようと言いつつ、

ドストエフスキーの「もう一人のヴラース」は、女房をなぐつたのでもなく、馬泥棒の仲間に入ったのでもない。かれが苦しんでいるその罪は、「聖なるものを穢した」という意識である。

その罪の償いのために、この農民は「膝行^{いざ}つて」の旅（苦行の旅）に出る。そしてある修道院の高名な「長老」を訪ね、自分の罪を告白したという。

このドストエフスキーの「ヴラース」の「聖なるものを穢した」罪とは、どういうことか。

ヴラースは、仲間の性悪な農民にそそのかされて、正教徒の道に背く破廉恥をやってみせる「くらべっこ」に加わる。その「神さまを恐れない破廉恥のくらべっこ」というのは、教会の聖体礼儀（ミサ）でいただいた御聖体（キリストの体^{からだ}）「聖餅」とも言う。小さなお供えのようなかたちの発酵パン。ипочопа）を、教会で食べないで持ち帰り、棒の先につけて畑に立て、それを鉄砲で撃ち落とすことである。

ところが、ヴラースが銃を構えて、棒の先の聖パンを撃とうとした瞬間、「とつぜん、目の前に、十字架があらわれ、そこにはりつけのキリストさまがおられたのです。わしは、鉄砲をもったまま氣を失ってぶったおれてしまいました」（21―34）。

わが行^{おこ}ないの罪の深さに目覚めたヴラースは、自分を罰したい思いに駆られ、苦行の旅に出た、という次第なのである。

ロシアの農民には、神聖なものを穢すことに対する強い畏れがあるのだ、とドストエフスキーは言いたい。

「三〇巻本ドストエフスキー全集」第二巻の「注釈」（この個所の注釈者は「プーシキンスキー・ドーム」の「ドストエフスキー・グループ」のアルヒーポワ）によれば、当時のロシア各地の農民の間に「聖

パンや十字架を鉄砲で撃つと、獵で撃ち損じをしなくなる」という迷信があり、ある民俗学者の「報告」には、ドストエフスキーがここで書いているとそっくりの「事件」も記録されているという。その「事件」を起こした百姓は、「聖物冒瀆」の罪で裁判にかけられた。ドストエフスキーの「ヴラース」の話の直接の種は、おそらく、一八七〇年代の、類似の「聖パン射撃未遂事件」を報じた新聞記事であっただろう、とアルヒーポワは推量している（三〇巻本ドストエフスキー全集」第二巻³⁹⁷）。

ドストエフスキーはナロードの迷信は知らないのである。

7 「聖なるもの」を感じる感覚の消滅

ここから、ドストエフスキーは「現代」ロシアの民衆^{ナロード}の心理分析へと進む。

「聖パン射撃未遂」は、ドストエフスキーにとつて、ロシア民衆の心理の決定的変化を示す象徴的な出来事だった。

ドストエフスキーはまず、へわたしはロシアのナロードを知っている。シベリアのオムスクの監獄で、ナロードである囚人たちと四年間一緒にすごした経験をもっている、わたしはたくさん³⁹⁸のナロードをこの目で見てきた」と誇らしげに言う。ドストエフスキーは自分は「ナロード通^{つう}」だと思っていた。「わたしはロシアの民衆を深く知りました。もしかするとこれだけ知っている人はざらにはいないかもしれませんが」（兄ミハイル宛の手紙、1854.2.22）。

しかし「ナロード通」であるはずの自分でさえ、この「現代」のヴラースたちの「破廉恥競争」は予想できなかった、とドストエフスキーは認めている。

「百姓が〈だれが一番破廉恥な大胆なことができるか〉と議論したというのだ。ロシアの農村でそんな議論と競争がなされる、そんなことがありうるということ、そのことにわたしはおどろいた。この事実はいへん多くのことを暗示している。わたしはこのような事実があるとは予想もしていなかった」（『作家の日記』の第五回「ヴラース」21―34f）。

一八四〇年代末、ドストエフスキーがシベリアのオムスク監獄で直接知ったというロシア民衆は、かれが『死の家の記録』に記しているところによれば、聖なる祝日を大切にする感覚を失っていない敬虔な正教徒である。大きな祝日にだれかがうつかり騒いだりすると、「不謹慎」だとして他の囚人たち全員が腹を立てた。人殺しや脱走兵といった凶暴な犯罪者までが教会の聖なる日には「行儀よく」していなければならないと思っていることを知って、ドストエフスキーは感動したという。「囚人たちのこの気風は実に立派なものだった。それは感動的ださえあった」（『死の家の記録』第一部十「降誕祭」）。ドストエフスキーのナロード崇拜はその感動からも育った。

ところがそれから二〇年余経ったいま、ロシアの農村に、「聖なるものを穢す〈流聖〉ごっこ」をするヴラースたちが現われた。かつては囚人ナロード内にさえ深く根づいていた敬虔の感

覚が、農奴解放後のロシア社会の激変の波に押し流されてしまったのだ、とドストエフスキーは考える。

〈われわれ知識人は、一五〇年前のピョートル一世の時代から、ヨーロッパの世俗文化に浸ってきており、自国の正教会の教えから離れてしまった。われわれは正教会の聖職者を敬っていないし、正教会が神聖としている儀礼や祝日を守っていない。流聖の罪を犯しているという意識さえもない。われわれは、世俗化された人間になったのだ。〉

ところが、われわれが長い時間をかけて経験してきたのと同じ精神的激動が、いまや、正教会の教えの内面で養われてきたナロードの間にまで広がっている。すなわち、聖なるものを聖なるものと感じなくなる変化が起きているのだ。かれらも、宗教的心性を棄てはじめたのだ、そうドストエフスキーは言う。

この「宗教的世界観から世俗的世界観」への移行、その兆候としての「流聖」、これもまた、ドストエフスキーの小説と社会評論の両方を貫く大きなテーマである。小説では、『虐げられた人たち』以来何度もくり返される、背徳者サド侯爵礼賛、『罪と罰』のスヴィドリガイロフの語る、聖母マリヤは若い娼婦、キリストはマリヤを買った男という想像、『カラマゾフの兄弟』のあちこちに現われる「人は、義しい人の墮落と恥辱を好む」情景など、その例は非常に多い（中村健之介「あこがれのマドンナ」参照）。

8 埒を越えたい欲求と懲罰欲求

そういう「聖から俗」への変化の原因は、農奴解放後のロシア社会の激変だけではなく、民衆自身がもともと持っているメンタリティ心性にもある、とドストエフスキーは言い出す。

民衆自身が持っているメンタリティとは何か。ドストエフスキーによれば、それは「埒を越えてしまいたいという欲求(потребность хватить через край)」(21—35)である。「思いきつて破廉恥なことをしでかしたい」、「深淵に飛び込むような戦慄を感じたい」、「破滅へ突き進む恐ろしさと刹那の快感を感じたい」という欲求が、もともとロシアの民衆の心に潜んでいるのだ、というのである。

ロシア正教会の「祝日」を大切にし、祝日に喧嘩をする者を「不謹慎」だ諫める気風が弱まってきたいま、いままで「聖なるもの」であったものが「急に重荷のように感じられて」きた。そして、潜んでいた「埒を越えてしまいたいという欲求」が顔を出した。後のことは考えないで、一切の拘束から離れてその「欲求」に身をまかせ、われを忘れてしまいたいという刹那主義が、いま発動したのだ。その刹那主義に駆られて、いまロシアの農民は、「色恋沙汰、酒、どんちゃんさわぎ」に没頭している、そうドストエフスキーは言う(21—35)。

この「現代ロシア農民解釈」にも、「主観的な人」ドストエフスキーが現われている。

ドストエフスキーが「自分はどういう性格の人間か」を直接

語った文章がいくつかあるが(たとえば断章「自分について」、妻アナ宛のルーレット賭博について言い訳の手紙等々)、そこには、必ず、世間常識、社会上の礼儀が「息苦しい」という気持ちが見表れている。そのために、自分で自分がわからなくなり、自分をコントロールできなくなることがある、とも言っている。

友人たちの手紙や回想記(たとえばA・マイコフの妻宛の手紙、ストラホフの「観察——ドストエフスキーに」等々)にも、ドストエフスキーが、友人を大事にする誠実な人間でありながら、しばしば「友人間の礼儀」を超えて、「自分の気分」に、「わがまま」に、身を委ねる男であることが書かれている。生涯の親友A・マイコフは、「ドストエフスキーは、普通では考えられないような性格なのだ」とまで書いている。ドストエフスキーの妻アンナは、夫は「奇妙な人」だと日記に書いている。ストラホフは、ドストエフスキーは「そうだと決まっていることが大嫌いだ。かれは2×2=4というのは認められない」と言っていた、と書いている。

そしてドストエフスキーの小説の多くの人物たちは、たとえば『地下室の手記』『賭博者』『白痴』『おかしい男の夢』の主要人物たちを思い出せばすぐわかるように、「きまり」というものを拘禁衣のように感じている。そして、「きまり」をすべてチャラにしまいたく欲求を必死に抑えている。

「埒を越えてしまいたいという欲求」に駆られていたのは、ロシア農民である前に、ドストエフスキー自身だったのである。

「聖パン」を撃ちたい「ヴラース」は、ドストエフスキー自身なのである。「わたしの性質は低劣かつ極端な熱中型です。どこへ行っても、何をやっても、わたしは最後のぎりぎりまで行ってしまう、いつも境界線を越えることばかりしてきたのです」（ドストエフスキーのA・マイコフ宛の手紙、1867.8.16/28）。

「作家の日記」第五回「ヴラース」の章全体は、そこに展開されているナロードの心理の分析や国民性格論もふくめて、ドストエフスキー自身の拡大自己解釈を含んでおり、かれ自身の想像の入道雲である。「作家の日記」は社会評論ではあるが、実体は「主観的な人」ドストエフスキーの思い込みと想像に満ちたエッセイなのである。

9 自己解放から自己懲罰へ

ここでドストエフスキーの「もう一人のヴラース」の話は、最初の話題「自己懲罰欲求」につながる。

「自分がこわれる」ことも辞さない「埒を越えてしまいたいという欲求」、そういう激しい自己解放の衝動の後には、反動として、必ず「自己救済の欲求」が湧いてくる、とドストエフスキーは言う。そして、後者（「自己救済の欲求」）の方が、「前者よりもずっと真剣なもの」なのだ。ここから、ナロードの「根本的な欲求」である「おそるべきへりくだりの力、自分を救おうとする欲求、苦しみを求めるはげしい渴望」が発生する、というのである。

わかりやすく言えば、ナロードは、現実から逃れたい、酔って羽目を外したいという欲求を常に抱いている。ウオットカが手に入り、ままとばかりに我を忘れるまで呑み、どんちゃんさわぎや自慢高慢をやらかした。ところが酔いが醒めると、はげしい後悔が襲ってきて、〈おれは悪いやつだ。許しがたいやつだ。償うには遅すぎるけれど、だれかおれを罰してくれ〉と、罰を「欲求する」というのである。

これは、まさに『罪と罰』の酔っ払いマルメラードフの語る「苦しみたい欲求」である。酔いが醒めたときの酔っ払いの後悔の心理である。ドストエフスキーはこの「苦しみの渴望」こそナロードの最大の精神的特徴であると、長々と弁じ立てる。（21―36）。

10 国民性の対比

ドストエフスキーは、この「苦しみたい欲求」に続けて、ロシア人の酔っ払いとドイツ人の酔っ払いの比較を行なっている。ロシア人、イギリス人、フランス人、ドイツ人の国民性の対比は、ドストエフスキー文学のテーマの一つである。ここでは、ドイツとロシアの比較である。

〈ドイツ人は、どんなに酔っても、その自己肯定、自己満足は微動だにしない。ドイツ人は鋼鉄の自信家である。それに對して、ロシア人はどんなうぬぼれ屋でも乱暴者でも、酔っている自分が醜い者であることを本能的に感じている。そして、大

法螺を吹いていながら、同時に内心では、その自分を恥しいと感じ、不安を感じ、良心の呵責に苦しんでさえいる」というのが、ドストエフスキーのドイツ人・ロシア人対比論である（このロシア国民性解釈の裏には、ドストエフスキー自身の二重の自意識「内面省察」がある。中村健之介「ドストエフスキー・ノート 読めば読むほど」^⑫参照）。

つまり、ドイツ人は「単細胞」の自信家で、自分の「建設意志」を疑わない。従ってかれらは意図したことを実現する。ところが、ロシア人には、美醜を感じる感覚があり、自己観察意識があり、自分の意志を自分が疑っている、というのである。

ドストエフスキーは一八四七年の『ペテルブルグ年代記』でも、これと同じ国民性対比を行なっている。ドイツ人は「定まった方式をありがたく感じる民族で、事実の美醜を感じない。かれらは定まった方式に従って直進する」。そして迷いも後悔もしない。

それに対してロシア人は、いつも、「花のかおりを強烈に感じとうとするあまり、花をもみくちやにし、すっかりだめにしてしまう」。そして必ず後悔する。だが新しい花に出会うと、前の失敗を忘れて、また同じ無知な蹂躪を犯してしまう。ロシア人はそういう民族なのだ、と言っている。

これと同じの国民性対比は、一八六六年の『賭博者』でもくり返されている。

一八七〇年代の大方のロシア知識人の好き嫌いから言えば、

フランスは好感のもてる国であった。

たしかに、農業国ロシアの知識人は、フランスの「商業の隆盛」を嫌い、フランス人の「金銭的利益第一主義」を軽蔑し、パリの歓楽街の「カンカン踊り」を「墮落」と批判した（ドストエフスキー『夏の印象をめぐる冬の随想』参照）。しかし、フランスは、依然として革命運動のメッカであり、プルードンはロシア知識人の目にはフリーエを継ぐ新しいモラルの提唱者であった。

それと対比的に、一八七一年、剛腕の「鉄血」宰相ビスマルクに率いられて普仏戦争に勝ち、ヨーロッパの強国に成り上がったドイツは、同時代のロシア知識人の目には、「全人類の和解」という「大いなる博愛」を知らない、自国民のことばかり考えている国民だった。野暮で、まじめに蓄財に励むだけの国民だった（ビントン『アイコンと斧』『社会思想への方向転換』参照393頁）。

ドストエフスキーは全体としては外国嫌い（クセノフォーブ）であった。そして、「ドイツ人は蓄財に一所懸命で、家父長制愛好の国民だ」と決めつけ、ドイツ鼯鼠^{びいき}だった友人のストラーホフをも見下していた。ロシアの方が感受性は豊かだという優越感を抱いていたのである。

日本には、ドストエフスキーのことを金科玉条のように真理として奉じる「ドストエフスキー崇拜者」がいるので、老婆心ながら言うておくが、こういう国民性対比論は、おもしろがるだけでよいのである。これは一種のアネクドットであり、同

時代の読者たちには受けたかもしれない。しかし、いまその「客観的」妥当性を検討する人はいないだろう。私たち、ドストエフスキー研究者にとつては、それは、ドストエフスキー個人の空想と「信念」として意味があるのである。

ドストエフスキーは、ロシアのナロードは、シベリアの監獄の囚人たちでさえ、「聖なるもの」に対する畏敬の念を保持していたが、それが十九世紀後半のロシア社会の激変で消滅しかかっている、と考えている。それも、「客観的」妥当性の有無を問うべき問題ではなく、ドストエフスキー個人の体験とかれの「現代ロシア解釈」として意味があるのである。

11 民衆のたましいの変化

ドストエフスキーによれば、ヴラースの「聖パン射撃未遂事件」には、右に書いたようなナロードの「心理的側面」が出ている。ナロードの半宗教的世界観が世俗的世界観へ変化し、「聖なるもの」に対する畏敬と秩序感覚が消滅してきたのである。

ロシアのナロードは「福音書」を読んだこともないし、キリスト教の教義も知らなかった。ロシア正教会の聖書は、ナロードのわからない教会スラヴ語（いわば「漢文」）で書かれていたし、それは、教会で朗誦されるのを聞くだけだった。しかし、「ナロードは、キリストを知っているし、大昔からキリストを自分の心に抱いている」と、ドストエフスキーは言う（21―38）。

なぜそう言えるのか。

ナロードは幼いときから教会の宗教的雰囲気になじんでいた。宗教は習慣だった。教会暦は生活暦だった。そしてかれらは、教会だけでなく、家でも街でも、道路脇の辻堂でも、いたるところに飾られている美しいイコンを目にしており、日常生活の中でキリストのイメージに触れ、そのイメージがかれの脳裏に焼きついていくからである。そのキリストのイメージによって、ナロードは美醜の感覚を身につけ、この世界を超えるもう一つの世界の存在を感じてきた。シベリアの懲役監獄の囚人たちでさえそうだった。「無自覚であつても非常に多くのことを知ることはできるのだから」（21―38）、とドストエフスキーは言っている。

ところがいまやナロードは、心に大切に抱いてきた、その美しいイメージに対して、自分から「侮辱を加える」ようになってきている。「埒を越えたい欲求」は、単なる自己解放のための「どんちゃん騒ぎ」の程度を超えて、これまで尊いと教えられてきた価値そのものに対する疑いになったのだ。ヴラースの「聖パン射撃未遂事件」は、その変化を示している。その意味でこの事件は「衝撃的」である、とドストエフスキーは言う。

「下層の民のたましいの内に、このように張りつめた、〔尊いものを敢えて穢そうとする〕挑戦的な感情が湧き起こってきたということ、このような暗い複雑な感覚がナロードの内に蠢（うごめ）いているということ、その事実が衝撃的である。そして、注目していただきたいが、そうしたものの全体が、ほとんど（意識的な

考え」にまで成長してきているのである」(21―38)

ドストエフスキーは「現代ロシア社会」の変化あるいは成熟をこのように感じていた。

この「ヴラース」は、明らかに『カラマーゾフの兄弟』のメルヂャコフを予告している。

そして、もう何度も書いてきたことだが(中村健之介『ドストエフスキー・作家の誕生』参照)、この「現代ロシア社会」こそ、小説と社会評論の全体を貫くドストエフスキーの最大関心事、すなわちドストエフスキーの文学全体のテーマなのである。

12 農奴解放後のロシア社会の変化

そこからドストエフスキーは自分の「現代ロシア」観を述べる。

「現代のヴラースは急速に変化しつつある。二月一九日〔一八六一年の農奴解放令発布〕以来、かれらの生きている社会の下層においても、われわれのいる上層と同じ激動が起きているのだ。〔中略〕そうなのだ、二月一九日をもって、ロシア史のピョートル時代〔貴族文化の時代〕は、本当に終わりを告げたのだ。わたしたちは、まったく未知の時代に入ってしまったているのだ」(21―41)。

ドストエフスキーは、十九世紀後半のロシアを、すなわちアレクサンドル二世の「大改革」後のロシアを、その時代の中にいながら、このようにとらえていた。ツァーリと教会と軍隊と

警察と地主貴族が取り仕切ってきたロシア社会は終わったのだ。いまは「まったく未知の時代」なのだ、これがドストエフスキーの「現代ロシア」観である。

これまでは「埒の内」にとどまる運命に従うだけだったナロードが、「埒を越えたい欲求」に突き動かされ、その全体が「ほとんど」(意識的な考え)にまで成長してきている」。

〈ドストエフスキーの社会評論は、客観的事実に基づいていない。社会評論はかれの偏見だけの心を映した「想像の入道雲」だ〉と批判する研究者は、少なくない。私自身もそう書いた(本稿第8節「埒を越えたい欲求と懲罰欲求」)。

しかし、ドストエフスキーのこのアレクサンドル二世時代把握を〈見当外れの時代把握だ。歪んだ想像だ〉として退けることはできないのではないだろうか。

たとえば、現代のアメリカの優れたロシア文化史家ビリントンは次のように述べている。

「アレクサンドル二世の治世に起きたことは、これまで何度かあったような〈海のむこうからやってきた仕掛け(西欧の新技術、хитрости)〉を用心深く迎えることではなく、大規模な、逆戻りのきかない近代化のはじまりだった。アレクサンドル二世は、農奴を解放し、新たな外国資本の投資を招来し、工業化を開始したことによって、ロシアをそれまでの動きの少ない農業主体のロシアから完全に切り離した。だが、近代化を選んだ帝国がどのような形態の社会と文化を採用していくのか、それ

はアレクサンドル二世自身も、また他のだれも、はっきりと決めることはできなかった。

これまでロシア史には西欧化の時期と孤立化（ロシア一国主義）の時期を分けるいろいろな切れ目があったが、この十九世紀中葉のロシア史の切れ目は、過去のすべての切れ目とははっきり異なっている。アレクサンドル二世時代に本格的にはじまったこの革新は、全国民を巻き込んだ変化であり、単にいくつかの選択された領域や集団だけのことではなかった。

ここからはじまった工業化と都市化は、その進展は気まぐれで、むらのあるものであったけれど、ロシアの自然環境と社会的諸関係の全体を一変させ、深い混乱を惹き起こした。

ロシアの歴史のこの最後の世紀（十九世紀）までは、思想と文化に起きたさまざまな発展はすべて、少数者に集中していたものだった。これまでは農民はただ黙って苦しみ続けてきた。その声が他者にとどいたのは、わずかに戦争、農民暴動、宗教的分派運動が起きたときだけだった。ところが、今度は違っていた」（ピリントン『アイコンと斧』『十九世紀後半』³⁶¹）。

13 客観的データの無い、主観的想像

ドストエフスキーは、社会科学的データに基づかないで、社会の動向を想像する力を持っていた。

しかし、データなしで社会の動向を判断するので、たとえば「シユトウンダ派」についての想像のように、見当外れの、独

断的判断も少なくない（『宣教師ニコライの全日記』第一巻註解No.62「レッドストック派」「シユトウンダ派」参照）。

前に、ドストエフスキーはナロードの迷信についても無知だったことを指摘したが、それも、かれが「データなし」で書く人だからである。

社会評論だけでなく小説でも、ドストエフスキーは、家具や髪型や服飾や乗り物など、その時代の趣味や流行を示す風俗データにはページを割かない。人間のその時その時の心理や気分や人間関係を想像し記述することに熱心なのである。ドナルド・ファンガーは、『ドストエフスキー、ロマンチック・リアリズム』で、それがドストエフスキーの小説の特徴だと言っている。描かれているのがもっぱら人の心理や気分や人間関係だから、ドストエフスキーの小説は時代と国を超えて読まれ続ける。「ルイ十六世時代風の肘掛け椅子」といった、バルザックやディケンズに多い風俗データは「すぐ古くなる（most easily decay）」と、ファンガーは言っている。

心理や気分や人間関係が中心、これは、E.H.カーも『ドストエフスキー伝』で強調していることである。

ドストエフスキーの育った家族（両親と七人のこどもたち。作家フォードル・ドストエフスキーは次男）は、モスクワの貧民病院の官舎に住んでいたのだが、カーは、その家族が「孤立していた」ことを強調している。

「この一家は孤立していた。社交生活というものがなく、一

家の活動はすべて、家庭内に止まって、対外的なものになかった。

ドストエフスキーは後年、人と人との交際を考えると、いつも家庭の団欒という、極く親しい関係で考えた。友人は、兄弟かそれ以上のものでなければならなかった。そうでない結合は、彼には我慢ができなかった。

こういう奇妙な幼年時代のために、かれは普通の社交ができなくなった。深く交えることはなくても人生の楽しみを増やしてくれる、そういう交際ができなくなった。そういう普通の交際を強いられると、ドストエフスキーは嫉妬深く、口やかましく、過度に敏感になる」。

カーは、ドストエフスキーのこの過剰な内面的欲求が、かれの文学の「長所」にもなっていると言う。

「これと同じ奇妙な欠点が、ドストエフスキーの文学にも認められる。しかし、文学の中では、その欠点は、長所ともなっている。

ドストエフスキーの作中人物のうちの、われわれの記憶に残る人物たちは、自分の魂を凝視して孤独な生活を送った者にある、強烈さをもって考えられている。彼の観察は、家族的的な、極めて視野の狭いものだが、驚くべき力強さを持っている」。

ドストエフスキーの小説は、処女作『貧しい人たち』以来、このカーの観察を裏書きしている。

14 ナロードはわたしたちを救ってくれる

ロシア社会は、識字率の観点から見ても、ピラミッド型をしている。世俗知識人階層は、人口の面では頂点の少数者である。聖職者階層（*духовенство*）の「教会知識人」を加えても、知識人の層は薄い。一八九七年、ロシア帝国で初めて本格的な^{センサス}国勢調査が行なわれた。当時ロシア帝国領だったポーランドを含めて、総人口は約一億二九〇〇万人。その内、書物や雑誌を読むほどの世俗知識人（教養階層、*образованные*）は、一パーセント弱である（帝政時代の優れた百科事典『ブロックガウス・エフロン百科事典』第五四卷一八九九年刊行の「ロシア」参照）。

幕末の函館へ来たロシア人宣教師ニコライが最も驚いたのは、日本の庶民の識字率の高いことであつた（中村健之介編訳『ニコライの日記』、岩波文庫）。

ドストエフスキーは、『カラマーゾフの兄弟』のイワンのスメルヂャコフ評に見てとれるように、巨大ピラミッド下層の巨大集団「ナロード」に、新しい複雑な感情が蠢き、新しい意識が形成されつつあるのを感じていた。ロシアはいま海図のない海へ乗り出した、と感じていた。

しかし、不思議なことに、社会の基底深部からの変化と一人一人の人間の意識の変化を感じとっていながら、ドストエフスキーは、不安や懸念を書いてはいない。ロシアの未来を案じている様子はない。また、ドストエフスキーは、トルストイのように自らカリスマとなつて「トルストイ主義運動

（толкотбо）という世論煽動活動に乗り出したり、民衆教導のための教育活動を起こそうとはまったく考えない。

〈ナロードという「下層」は、激動に巻き込まれ、揺れている〉、——ドストエフスキーは自分で診断を下しながら、そう言った舌の根も乾かぬうちに、その「下層」の船に乗っていればわれらは大丈夫だ、と言い出す。こういうときドストエフスキーは、具体的な近未来像を描くことをしない。突然予言者のようになって、〈やがて民衆は自らを救い、わたしたちインテリをも救ってくれるはずだ〉と言い出す。

「ヴラースは目覚めるだろう。そして神のための仕事にとりかかることだろう。本当に悲惨なことになるかもしれない。どうなるにせよ、ヴラースは自分の力で自分を救い出すだろう。自分を救い、わたしたちをも救い出してくれるだろう。なぜなら、またしても言うが、光と救いは下から輝き初めるのだから。それは、わが国のリベラル派のまったく予想もしないかたちで起こるかもしれない」（21―41）。

こんな「予言」を聞いて、私たち読者は、肩透かしを食ったような気持になる。

社会評論家ドストエフスキーは「現代ロシア」が困難な状況にあることを認め、民衆が「本当に悲惨なこと」になるかもしれないと予感しているながら、手をのばして相手を助けようとはまったく思わない。悲惨回避のために「わたしたち」インテリは何か役に立つことができるかもしれない、とは考えない。

逆に、「わたしたち」はその「悲惨なこと」になるかもしれないナロードに依存する者だ、「ヴラースは、わたしたちをも救ってくれるだろう」と言うのである。

この無責任な予言の背後には、「現代ヨーロッパ」批判がある。〈ヨーロッパは完全に世俗化し、博愛は失われ、個人主義が根を張り、金こそが最高価値となり、自己保身が最高の知恵となった。そういう社会には、もはや救いの道はない〉というヨーロッパ批判である。ロシア社会も世俗化の道へ大きく踏み出したが、ナロードは、おそらくそうはならないだろう、そういう、空想に近い希望的観測がある。

ここに、ドストエフスキーの飛躍がある。かれは、空想に頼って安心していることができる。